

## 第一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

自分の老いに気づくのは、あれができなくなった、これもできなくなったと思われられることがどんどん増えてゆくときである。ふと気がつけば、新聞を眼めから遠ざけている、徹夜ができなくなった、脚がよろつくようになった……。しかし、衰えというのは何も肉体に訪れるだけではない。定年を迎え、とたんに自分のもとを訪れるひとがぐつと減って、ひとは、ああ自分の実力だと思ってきたものがじつのところ会社の看板の力だったのだと思ひ知り、愕然がくぜんとなつて氣力をなくしてしまひもする。

そんななかで、自分とはいったい何だったのだろうか、考えるともなく考えはじめる。勤労者、夫／妻、父／母、息子／娘、さらには嫁／婿といった役割から解かれ、ひとりのむきだしの「個」として、自分の存在と対面しなければならなくなるからだ。社会のなかに住むひとりの役割をもった存在として、しなければならぬこと、させられることにかまけられているあいだはままだい(1)い。そういうごまかしがきかなくなるのが老いという時期だ。

これを言いかえると、老いとともにひとは、人生を「できる」ことからでなく、「できない」こと、もしくは「できなかった」ことから見据えるようになるということだ。そして「できなくなった」ことのほうから自分を見つめるようになるということは、何をするか(あるいは、してきたか)というよりも、自分が何であるか(あるいは、あつたか)という問いに、より差し迫つたかたちでさらされるようになるということだ。

とはいえ、考えてみれば、これは老いの時期にかぎつたことではない。少なからぬ若者もまた、社会生活の入口のところすでに、傷とかあきらめといったひりひりするような痛みを深くため込み、力なく佇たすんでいる。人生のあらゆる類型がすでに出そろつているところに生まれてきて、これからの道のりが、その終焉しゆうえんの姿までほとんど「見えちゃつて」いて、彼／彼女らは「人生の盛り」を「もう済んだ」ものとしてしか受けとめられなくなつていらしい。

「強者」と「弱者」といった区分けがあたりまえのようになされている。自己決定ができ、自己責任をとることのできる「強い」人間像と、だれかに支えられなければ生きようがない「弱い」人間像とである。けれども、「強い」「弱い」はそんなにかんたんに言え

ることなのか。そして、「できない」ということは、他者の支えや介添えなしに動けない受け身の存在でしかないということなのか。

できない(disable)ということ、何か身体を見舞う事実として実体的にとらえてはいけない。「できない」というのは、たしかに肉体的な制限によってできないこともあるが、ある社会的・時代的な条件のもとでそうであるにすぎない場合や、ある「できる」ことの基準があつてそこから「できない」とされるにすぎないことが多い。

老いにおいて、できないということ、ひとは問題とは考えない。それは遅れでもなければ、不適応でもなく、なおさら矯正されるべきものでもない。<sup>(2)</sup> その意味では、同じことが〈障害〉についても言える。できないことを「できる」ことの埋め合わせるべき欠如と考えるのではなく、「できない」ことそのこの意味を考え、そこからあえて言えば、「できなくなる」ことでできるようになること」というか、かならずしも「できる」ことをめざさない、そういう生のあり方をこそ考えねばならないであろう。ノーマライゼーション(ノーマル化)ではなく、ノーマル(普通・正常)という規範的な概念そのものを、限られた概念として相対化してゆくときに、批判的にもはたらく視点としてである。

<sup>(3)</sup> こういう視点に立つことを教えてくれたのは、ピアニスト・館野泉たののいずみさんのコンサートだった。

長年お住まいになっているフィンランドでのリサイタルで、最後の曲を弾き終わろうかというときに、右手が利かなくなつた。かろうじて弾き終え、お辞儀をしてステージを去ろうとして昏倒こんとうした。しばらくしてあらためて見ると、「隆々と盛り上がっていた腕の筋肉はなくなつて、その付け根から、干された鳥賊いかのように皮膚がぶら下がっていた」。脳出血が館野さんを襲つたのだつた。

数年後、日本で開かれた「復帰リサイタル」に行った。左手だけによる演奏は、バッハの無伴奏バイオリン曲をブラームスが編曲した「シャコンヌ」から始まつた。正直を言えば、はじめはおそろおそろ凝視していた。指さばき、ペダルを踏む足先の動き、右手の位置、そして表情を、である。単音が打ち鳴らされ、厚いその音色に引き込まれそうになりながら、それでもまだ訝いぶかつていた。ひきつるような指の苦悶くもんが、その面もちにふとよぎるのではないか、低音から高音まで一気に旋律を走るなかわずかに音

の隙間<sup>すきま</sup>ができるのではないか、その音の隙間を、聴いているわたしが想像力でつないでいるのではないか……と怪しんでいた。が、そんな生意気は数分でぶっ飛ばされた。鉄線のような緊張感が漂っているのに、どこかおらかな、まるみのある音、ふくらみのある音色。幻の右手が連弾しているとしか思えない。緩急のきいたどっしりした曲想、ときにその枝葉が涼風にそよぐような心地よさである。

ふたたび弾こうと気を立てなおすまでの悔しさと悲しみは、想像を絶する。残された手で弾くというよりは、からだ全体の動きをそっくり入れ換える必要があっただろう。弦楽器のように旋律をふくらませたり、しなを作ったりということもできない。弾くだけ、叩く<sup>たた</sup>だけ、ふれるだけの鍵盤<sup>けんばん</sup>に、ごまかしはきかない。左から新たな楽音を紡ぎだすその仕方を手に入れるまで、いったいどれほど長いトンネルをくぐったことだろう。

五本の指しか使えないというのは、たしかに制約である。だが、十本の指しか使えないというのも制約である。ひとが不断に息を継がねばならないのと、ついに空を舞うのができないのと、同じように。問題はそこで何をつきつめるかだ。そこに何が訪れるかだ。そのとき、制約はもはや限界ではなく、ひととその歴史を超えたある新しい価値のかたちとなる。ある時代、ある場所、ある両親の下に生まれたことが、そのひとが生みだす「作品」に厚みをあたえこそすれ、もはや「制約」でもなんでもないように。

<sup>(4)</sup>このように、ひとは *disable* な状態のなかで、人間であるということの条件により深く向きあっている。

（鷺田清一『わかりやすいはわかりにくい？—臨床哲学講座』による）

問一 傍線部分(1)「そういうごまかしがあるが、どういうごまかし」か、説明せよ。

問二 傍線部分(2)「その意味では、同じことが障害についても言える」とあるが、どのような点が同じであると考えられるのか、説明せよ。

問三 傍線部分(3)「こういう視点に立つことを教えてくれたのは、ピアニスト・館野泉さんのコンサートだった」とあるが、「こういう視点に立つ」とはどういうことか、コンサートのエピソードを踏まえて、説明せよ。

問四 傍線部分(4)「このように、ひとは *disable* な状態のなかで、人間であるということの条件により深く向きあっている」とあるが、どういうことか、文章全体を踏まえて、説明せよ。

## 第二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

小学生の頃、趣味といえは急須を磨くことだった。安価な万古焼の急須を乾いた布巾でこすっていると、やがて艶が出てくる。それが無性にうれしくて毎日磨いていたのだった。

急須磨きの趣味は中学一年まで続いた。週に一度、鉾山の社宅から帰ってくる父は急須などにうつつをぬかしている長男を厳しくしかっていた。

「そんな老人くさい真似はやめろ」

父のヒステリックな言葉の裏には祖母への反感が込められているようだった。

婿としてこの家に入ったものの、妻に先立たれてしまい、その後再婚して家を出た彼の複雑な立場がおぼろげながら理解できるところになったのは大学生になってからのことだった。祖母は母の死後さっさと再婚を決めた父をこころよく思っておらず、孫たちはおれが育てるから、と強く主張していたらしい。

父としては二人の子供を鉾山の社宅に引き取って新しい妻とともに暮らしたかったのだろうが、すっかりお祖母ちゃん子になってしまった子供たちは彼について行くのを泣いていやがった。しかたなく、週末に帰って一日だけ子供たちの顔を見、またバイクで二時間かかる鉾山にもどる生活を続けていたのだった。

自分の足場である家庭がそんな不安定な状況に置かれているのは子供心にも肌で感じていた。そんなわけで、急須磨きにのめり込むことで崩れそうになる精神の平衡を保とうとしていたところもあつたのである。

しかし、三カ月も磨いてようやくいい艶が出始めたなと思う頃、必ず注ぎ口の先をどこかにぶつけてかいてしまった。祖母はそこに透明なビニールの管を切ったものを押し込んで平気な顔をしていたが、どこかがかけ、完全なかたちを保てなくなった急

須にはすぐに興味がなくなり、それ以上磨く気がしなくなった。

「急須は茶をいれるもんだから、茶がはいりゃあいいだんべや」

祖母が懸命になぐさめてくれたのだが、一度ふてくされてしまうと手がつけられず、めしも食わない、学校にも行かないありさまだった。根負けした祖母が新しい急須を買ってくれると、即座に態度を変え、へらへらと創り話<sup>つくりわ</sup>しながらひまさえあれば磨いていた。

中学一年の終わる春、一足先に東京の鉱山会社の事務職となつて東京に出ていた父について転校することが決まった。その頃、運よく二年間もかけたところのないまま磨いてきた急須があつた。黒く錆びた鉄の玉を油で磨きあげたような、硬質の光沢を放つ急須だった。

明日東京に旅立つ日、その急須を手にして谷間の集落の底を流れる川の岸に立った。ネコヤナギの固い芽に春の予感があつたが、川面<sup>かわも</sup>を吹く風の冷たさはまだ冬のそれだった。

何度かためらつた。このまま東京に持つて行つても、それはそれでいいのではないかと妥協に傾きもした。だが、ふいにセーター<sup>(2)</sup>の背を押した突風にうながされて、急須を思いきり投げ出した。

澄んだ青空を背景に鈍い光を放つてから、急須は川の中心にある大石に落ち、砕け散つた。雪解けの増水が始まっている川音に消されて、割れた音は耳に届かなかつた。その分だけ、頭の中に鋭い破碎音が創り出されてしまい、家にもどつてからも耳の奥で執拗<sup>しつよう</sup>に反響し続けていた。

再び急須を磨き始めたのはそれから十年後、秋田で医学生として暮らして四年目の秋だった。大学では内科や精神科などの臨床医学の講義が行われていたが、出席する気力をまったくなくしていた。それでも夏休み前まではなんとか半分程度の講義には出ていたのだが、休み明けからは出席率ゼロになつてしまった。

大学に行くつもりはあり、行かなくてはと六畳一間のアパートで目覚めはするのだが、蒲団ふとんの中で退屈な教室の様子を想像してしまうともうだめで、そのまま膝ひざを抱えて再び眠ってしまうのだった。刺激の少ない北国の小都市での生活にすっかり飽きていたし、このまま漫然と医者になつてしまうことへのためらいもあった。理由は後になればいくらでもつけられるのだが、このときはただ行きたくても行けなかつたのである。大学に向かつて自転車をこぎ出すと頭痛や吐き気がし、遠ざかれば症状は消えた。いかにも勝手すぎる体だとあきれ果てはしたものの、実際に気分が悪くなってしまうのだからどうにもならず、アパートの万年床に引き返して小説など読むしかなかったのだ。

午後三時になると銭湯が開く。老人たちと一番湯に入った。すると心身ともにすっきりしてなんでもできそうな気になつてくる。なんのことはない、朝悪くて午後から夕にかけて気分が回復してくる軽症うつ病の症状そのものなのであるが、不勉強で無自覚な医学生が気づくはずもなく、なんとかその日その日をなだめ暮らしていたのだ。

銭湯の脇わきの狭い路地を入つたつきあたりにお茶を売る店があつた。色あせた紺色ののれんに白く染めぬかれた「茶」の字が破れて読みにくくなつていた。

ある日、新装開店に並んで遊んだパチンコで三千円もうけた。国立大学の授業料が月千円だった頃の三千円である。風呂ふろに入り、さてあぶく銭でなにかうまいものでも食うか、と外に出たら、この貧相なお茶屋が目に入った。そういえばこのところ上質な煎茶せんちゃを飲んでいない。羊羹ようかんでも買って帰り、ゆつくりと茶でもいれようか、となんの気なしにきしむガラス戸を開けて店に入った。

三坪ばかりの店内は正面に茶袋の並んだガラスケース、右の棚に急須、左に湯飲みの棚があつた。主人は顔色のすぐれない坊主頭のやせた男で、ガラスケースの裏すわに坐つて本を読んでいた。丸い眼鏡をかけ、襟の汚れた白いワイシャツを着た彼の第一印象は、はやらない古本屋の店主そのものだった。

いらつしやいの言葉もなかつた。とりあえず右側の棚を見てみると、いきなりかたちのよい常滑焼とこなめの急須に目を奪われた。片

方の掌<sup>てのひら</sup>で包めるほどのかわいらしい円筒形で、注ぎ口と取手<sup>とって</sup>のバランスも絶妙であり、一瞬のうちに欲しくなった。

「これ、いくらですか」

値札が付いていなかったもので、急須を手に取り、ガラスケースの上に置いた。

主人はめんどくさそうに本から目を上げ、眼鏡を下にずらしてこちらを見た。黒ずんだ顔に似合わない澄んだ目だった。

「三千元」

喉<sup>のど</sup>のどこかから息のもれているような細かい声だった。

この主人を相手に値引きの交渉をするのは気乗りがしなかったもので、ちようどズボンのポケットにあった三千元を出した。

「学生さんかね」

主人は無造作に置かれたガラスケースの上の千円札から目をそらすようにして下を向いた。

「はい、そうです」

早く急須を手に入れたかったから、足踏みをしながら答えた。

「急須はバランスが命なんだよ。三千元も出して買うんだから、これだけは試しておかなくちゃいけないよ」

主人はそう言うのと急須の蓋<sup>ふた</sup>を取り、取手を下にしてガラスケースの上にそつと立てた。

急須は立った。

「ほら、これがバランスのいい急須なんだよ。基本だよ。何事もバランスが基本だよね」

主人は弱よわしく笑ったが、上と下の前歯が二、三本抜けていて、そこから妙に赤い舌がのぞいていた。

「これ、サービスだから」

ケースの中から百グラムの煎茶の袋を出す前に、主人は膝の上ののせていた本を端に置いた。

布の装丁がほころびかけた「芥川龍之介全集」の一冊だった。



「芥川ですね」

サービスの煎茶をもらってしまつて返礼の言葉がとっさに思いつかなかつたものだから、精一杯の愛想笑いを造つてみた。

「うん、そう、芥川。昔の本だけど、今読みなおしてみると、あらためていいよね。この急須みたいに、芥川の記事はバランスがいいよね」

煎茶をていねいに包装してくれながら話す主人の口調に秋田訛りがなく、か弱かつた声にいくらか力がこもつた。

年齢は五十代の半ばくらいなのだろうか。芥川の話になると、か弱かつた声にいくらか力がこもつた。

「芥川の記事ではなにが一番好きですか」

純粋な本好きらしいと判断して遠慮なく聞いてみた。秋田に来てから、小説を読む友など一人もいなかった。

東京で過ごした中学、高校の間に、文庫本で手に入る芥川の記事はすべて読んでいた。もつぱらストーリーのおもしろさにひかれた子供っぽい読書体験ではあつたが、それでもほんの少しだけ、小説を書くという行為の楽しさと恐ろしさを教わつた。

「いつまでも芥川ばかり読んでるのは幼稚だつていう人たちがいるけれど、『秋』なんていいよね。大人の小説だよ。みんなが思っている以上に芥川の記事で奥が深いような気がするんだよ」

主人は座敷の上がり口に置いてあつたポットのお湯を注いで茶をいれてくれた。

猪口ちよこに似た小ぶりの湯飲みに、丸く小さな急須で最後の一滴まで注いでくれた茶はさわやかな甘みを含んだ玉露だつた。出された木製の丸椅子いすに坐り、ガラスケース越しに主人と向き合つてしばし芥川談議に夢中になつた。

『秋』には全体に大正末期の東京郊外の秋の空気が感じられるんだよ。セピア色で、品がいいんだよ。せつない恋の物語ではあるんだけど、登場人物たちが澄んだ秋の空気にくるまれてるから清潔で上品なんだよね。いいよね、『秋』は」

互いに芥川の記事の中では『秋』が最高傑作であろうということ意見が一致したのだが、主人の淡々とした批評には押しつけがましくないやわらかで確実な説得力があつた。うなずきながら聞いているうちに時の経つのを忘れた。

いつの間にか陽が暮れかけていて、路地の奥の店内は暗くなってきた。三杯目の玉露を飲み終えたところで椅子を立った主人も芥川のもものは若い頃にすべて読み終えているらしかったので、このまま話していたら夜になってしまいそうだった。

「いやあ、久しぶりに芥川の話ができて楽しかったですよ。またいつでも寄って下さいよ」

主人は急須を灰色の布巾で包んだ上で、自転車だったらこうしておかなくちゃあ、と新聞紙を丸めて四方を押さえ、ガムテープでとめてくれた。

路地を出るところでふり返ると、夕闇ゆふやみにおおわれたお茶屋はいたるところ板壁がはげ落ち、屋根のトタンも赤錆あかさびに侵蝕しんしょくされつくしているとても貧しげな二階屋だった。なんでこんな店に入ってみる気になったのか。講義に出ないでいる間に体内の羅針盤が狂ってしまい、とんでもない迷路に入り込んでしまったのか。

正体不明の主人と文学の話をしたあとには、<sup>(3)</sup>不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまったような全身で覚える頼りなさの感覚が残った。だから、アパートに帰る暗い裏道を、いつもより固くハンドルを握って自転車をこいだ。

その夜から急須を磨き始めた。朱色の常滑焼には万古焼のごとき硬質の艶は望むべくもなかったが、朱は朱としてそれなりに磨き出すべき色はつきりと頭に描けていた。

（南木佳士「急須」による）

問一 傍線部分(1)「そんな不安定な状況」とあるが、どのような状況か、説明せよ。

問二 傍線部分(2)「ふいにセーターの背を押した突風にうながされて、急須を思いきり投げ出した」とあるが、なぜ「急須」を「投げ出した」のか、説明せよ。

問三 傍線部分(3)「不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまったような全身で覚える頼りなさの感覚が残った」とあるが、(イ)どうして「不思議な満足感」を覚えたのか、(ロ)「頼りなさの感覚」が残ったのはなぜか、それぞれ説明せよ。

問四 「急須を磨く」ことは、主人公にとってどのような意味があるか、文章全体を踏まえて、説明せよ。

第三問 次の文章は、鳥羽院の近臣であった平忠盛をめぐる二つの逸話である。これを読んで、後の問に答えよ。

忠盛、備前国より都へのぼりたりけるに、鳥羽院、「明石の浦はいかに」と尋ねありければ、

〔A〕 あり明の月もあかしの浦風に浪ばかりこそよるとみえしか

と申したりければ、御感ありけり。この歌は金葉集にぞ入れられける。

忠盛また仙洞に最愛の女房をもてかよはれけるが、ある時その女房のつぼねに、端つまに月いだしたる扇を忘れていでられたりければ、かたへの女房たち、「これはいづくよりの月影ぞや。いでどころおぼつかなし」とわらひあはれければ、かの女房、

〔B〕 雲居よりただもりきたる月なればおぼろけにては言はじとぞおもふ

とよみたりければ、いとどあさからずぞ思はれける。薩摩守忠度の母これなり。

<sup>(2)</sup> 似るを友とかやの風情に、忠盛もすいたりければ、かの女房も優なりけり。

（『平家物語』による）

〔注〕 仙洞Ⅱ院の御所。

問一 Aの歌について、用いられている掛詞がよくわかるように現代語訳せよ。

問二 傍線部分(1)「これはいづくよりの月影ぞや。いでどころおぼつかなし」とあるが、これとBの歌とのやりとりのおもしろ

みはどのようなところにあるのか、説明せよ。

問三 傍線部分(2)「似るを友とかやの風情」とはどのようなことを言っているのか、本文の内容を踏まえて説明せよ。

第四問 次の文章A・Bを読んで、後の問に答えよ。（設問の都合上、返り点、送り仮名を省略したところがある。）

A「国民の窮状は「貨輕錢重」と「徵税暗加」とによると考えた皇帝が、問題解決の方策を臣下にもとめたもの」

当<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>姓<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>困<sup>ノ</sup>、衆<sup>ノ</sup>情<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>知<sup>ル</sup>。<sup>(1)</sup>欲<sup>ス</sup>減<sup>ス</sup>税<sup>ス</sup>則<sup>チ</sup>国<sup>ノ</sup>用<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>充<sup>ル</sup>、欲<sup>ス</sup>レ<sup>バ</sup>依<sup>ラ</sup>レ<sup>テ</sup>旧<sup>ノ</sup>則<sup>ニ</sup>人<sup>チ</sup>困<sup>ル</sup>轉<sup>タ</sup>甚<sup>シ</sup>。皆<sup>ル</sup>由<sup>ル</sup>ニ<sup>(1)</sup>貨<sup>ノ</sup>輕<sup>ク</sup>錢<sup>ノ</sup>重<sup>ク</sup>・徵<sup>ス</sup>税<sup>ス</sup>暗<sup>ニ</sup>加<sup>フ</sup>。<sup>(2)</sup>宜<sup>ク</sup>令<sup>ス</sup>百<sup>ノ</sup>寮<sup>ノ</sup>各<sup>ノ</sup>陳<sup>ス</sup>意<sup>見</sup>以<sup>テ</sup>革<sup>ス</sup>中<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>弊<sup>上</sup>。

B「元稹の答申」

臣<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>當<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>姓<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>困<sup>ノ</sup>、其<sup>ノ</sup>弊<sup>ノ</sup>数<sup>ノ</sup>十<sup>ナリ</sup>。不<sup>ル</sup>獨<sup>ニ</sup>在<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>錢<sup>ノ</sup>貨<sup>ノ</sup>徵<sup>ス</sup>税<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>謂<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。既<sup>ニ</sup>聖<sup>ノ</sup>問<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。又<sup>タ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>黎<sup>ノ</sup>庶<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>重<sup>ク</sup>困<sup>ノ</sup>、不<sup>レ</sup>在<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>賦<sup>ノ</sup>税<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>暗<sup>ニ</sup>加<sup>フ</sup>。<sup>(3)</sup>患<sup>ハ</sup>在<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>剥<sup>ス</sup>奪<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>已<sup>マ</sup>。錢<sup>ノ</sup>貨<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>輕<sup>ク</sup>重<sup>ク</sup>、不<sup>レ</sup>在<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>議<sup>ス</sup>論<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>當<sup>ラ</sup>、患<sup>ハ</sup>在<sup>ラ</sup>於<sup>テ</sup>法<sup>ノ</sup>令<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>行<sup>ハレ</sup>。<sup>(4)</sup>

今天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>賦<sup>ノ</sup>税<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>法<sup>也</sup>、厚<sup>ク</sup>薄<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>概<sup>也</sup>。然<sup>レ</sup>而<sup>モ</sup>廉<sup>能</sup>莅<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>生<sup>ス</sup>息<sup>ス</sup>、貪<sup>ム</sup>

愚<sup>ぐ</sup>莅<sup>スバ</sup>之<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>敗傷<sup>ス</sup>。蓋<sup>けだし</sup>得<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>理<sup>ミ</sup>之<sup>ヲ</sup>明<sup>カ</sup>驗<sup>ス</sup>也。豈<sup>ニ</sup>徵<sup>ス</sup>稅<sup>ト</sup>暗<sup>カ</sup>加<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>乎<sup>ナラン</sup>。

自<sup>リ</sup>嶺<sup>ニ</sup>已<sup>ル</sup>南<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>金<sup>ヲ</sup>銀<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>貨<sup>ト</sup>幣<sup>ト</sup>。自<sup>リ</sup>巴<sup>ニ</sup>已<sup>ル</sup>外<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>塩<sup>ヲ</sup>帛<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>交<sup>ト</sup>易<sup>ト</sup>。黔<sup>ケン</sup>・巫<sup>フ</sup>。

溪<sup>シ</sup>・峽<sup>ヤ</sup>、大<sup>キ</sup>抵<sup>シ</sup>用<sup>ニ</sup>水<sup>ヲ</sup>銀<sup>ニ</sup>・硃<sup>シユ</sup>砂<sup>シヤ</sup>・繒<sup>ソウ</sup>綵<sup>サイ</sup>・巾<sup>キ</sup>帽<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>相<sup>カフ</sup>市<sup>ト</sup>。然<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>前<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>

理<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>明<sup>カ</sup>驗<sup>ス</sup>也。豈<sup>ニ</sup>錢<sup>ヲ</sup>重<sup>シ</sup>貨<sup>ヲ</sup>輕<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>乎<sup>ナラン</sup>。

後<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>擾<sup>ム</sup>。東<sup>ノ</sup>郡<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>耗<sup>ス</sup>、西<sup>ノ</sup>郡<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>贏<sup>ス</sup>。又<sup>タ</sup>得<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>

（『元氏長慶集』による）

〔注〕

① 貨輕錢重⇨銅錢が貴重視され、それに連動して物の価値が下落すること。

② 徵稅暗加⇨稅を気づかれないように上げること。

③ 黎庶⇨庶民。

④ 法令⇨ここでは、經濟活動を円滑にするための法令。

⑤⑥⑦ 自嶺已南、自巴已外、黔・巫・溪・峽⇨いずれも唐の辺縁地で、銅錢による經濟活動が普及していない地域。

問一 傍線部分(1)「欲減稅則國用不充」を現代語訳せよ。

問二 傍線部分(2)「宜令百寮各陳意見以革其弊」を書き下し文にせよ。

問三 傍線部分(3)「剝奪」するのはどのような役人か、もつとも適切な二文字を抜き出せ。

問四 波線部分(イ)(ロ)「得人則理之明驗也」は、それぞれどのような人を得れば問題が解決するといふのか、説明せよ。